



Title	〈あえのこと〉のこと：近代日本民族誌システムの探求
Author(s)	菊地, 暁
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41335
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	きく ち あきら 菊 地 暁
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 3 2 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成11年3月25日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 論 文 名	〈あえのこと〉のこと——近代日本民族誌システムの探求——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 中村 生雄 (副査) 教 授 川村 邦光 助教授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代の日本民俗学が遂行してきた民族誌（エスノグラフィ）作成という営みについての批判的な検討を目的としており、具体的には現在「民間の新嘗」として広く知れ渡っている奥能登の〈あえのこと〉について、それがどのような経緯で日本民俗の代表例の位置を占め、そこに種々の意味が付与されるにいたったのかを明らかにしたものである。分量は論文本体が400字詰め850枚、付録として付された文献一覧・関連年表・人名一覧などが200枚強、さらに関連図版と写真が120点ほどある。

近年、文化人類学の世界においては、研究者がその研究対象である「未開社会」をどのように記述するのかをめぐって深刻な反省が行なわれ、「文明」の側に身を置く研究者がそれを「客観的」に記述し分析するという行為そのものが、そのような営みを成り立たせている政治的・文化的な状況と文脈から決して自由ではありえないという認識が行き渡っている。そのことは、いわゆる欧米の文化人類学だけの問題であるにとどまらず、それとはつねに一線を画し、「一国民俗学」を標榜しつつきてきた日本の民俗学にとっても決して無縁ではない。

そこで申請者は、日本民俗学の主導者・柳田国男の果たした歴史的な役割とその問題性を、当初は大正時代の一村史に「田祭り」として紹介されていたにすぎない農村行事が、彼の思い描いた日本人の「稲の祭り」と「家永統の願い」を具現するものとして意味づけられ、それに沿う儀礼内容と名称の意義（饗宴の「アエ」と祭事の「コト」という解釈）が排他的に選択されていくプロセスなどを、関連資料を精査して解明しようとする。

本論文の構成は、第1章で戦後日本の民俗文化財行政の問題、とりわけ民俗芸能や民俗儀礼・民俗行事が国民国家の要請にもとづいて日本を構成する文化要素の一つとして認定されていくさまが検討され、第2章では奥能登地方で一般に「田の神の祭り」と呼ばれていた行事に、柳田国男によって日本人の稲の祭りのアーキタイプの位置が割り振られ、のちの〈あえのこと〉像へと集約されていく過程が解明される。第3章では、いわゆる「民俗写真」の形成過程を論じるなかで、〈あえのこと〉を撮影した写真の孕む問題性を検討し、さらに第4章では、〈あえのこと〉が国指定重要無形民俗文化財に指定されるにともなって保存会組織がこの行事を調査保存することになったものの、そのような動きが逆に〈あえのこと〉の観光化や形骸化を招いていった状況が追跡される。

論文審査の結果の要旨

本論文は、柳田国男を始めとする〈あえのこと〉関連のテキストがどのように読まれ、流用され、解釈されていったかを丹念に追求することで、柳田じしんの「意図」には還元されえない「民俗学」という知のありかたを浮かびあがらせようとした新しい試みである。そのことによって、文化財行政の主導者であった宮本馨太郎や、〈あえのこと〉の初期の調査者である小寺廉吉・四柳嘉考、また民俗写真の大成者・芳賀日出男、〈あえのこと〉を民俗文化財として保存し普及に努めた原田正彰など、柳田国男の直接間接の影響下にあって〈あえのこと〉に「民間の新嘗」の内実を付与した人びとの社会的・イデオロギー的な位置づけを積極的に試みたものと言える。

また、戦後の文化財行政における「民俗文化財研究協議会」の役割や、柳田が〈あえのこと〉の意味を最終的に画定する舞台となった「にひなめ研究会」の位置づけ、あるいは、柳田によって提示された〈あえのこと〉像を民俗調査の技法を通じて追認していくことになった「九学会連合能登調査」の実態などに鋭い分析を加えたことも評価される。

そして、これらの試みは、関連資料の博搜と、そうした基礎作業を踏まえて発揮された分析力・構想力の成果にほかならない。また、知識社会学的な関心と基礎的な歴史分析の方法との緊密なむすびつきも特筆されるであろう。

しかし、本研究の問題点として、民俗誌作成にとってのフィールド調査の役割をどう理解するかという問題があらう。申請者は本論文での歴史資料の詳細な分析に比して、フィールドでの聞き取りをなかば意図的に軽視しているところがあり、そのためか、そこでのインフォーマントの語りはいささか単純化されすぎている。やはり、生活の場に根ざし、それゆえに一義的な意味づけを拒む多様な語りの位相を引き出すためにも、フィールド調査の重要性についての再考が必須であらう。

とはいえ、上述のとおり本論文的方法的な斬新さと豊かな構想力・分析力は特筆すべきものであり、博士（文学）の学位を授与するに十分値するものであると判断する。